
涼宮ハルヒの消去

鷹山 聖慈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

涼宮ハルヒの消去

【Nコード】

N5378I

【作者名】

鷹山 聖慈

【あらすじ】

Enterキーを押下することで、あの世界は俺の住む世界ではないと断定した。

だが俺はここに帰ってきた。

何故？

答えはたった一枚の紙に始まり、たった一枚の紙に終わる。

なんてことはないものをお前は待っていたようだ。

涼宮ハルヒの消去から派生させたストーリーです。

プロローグ（前書き）

涼宮ハルヒの消失と暴走を読んで浮かんだ、なんてことないネタを小説化してみました。

こんなん始めたばつかの輩が書いた内容なのでたかが知れてます。r zが、読んでいただければ幸いですm () () m

プロローグ

年明けの1月。

北風がびいぷうと吹き荒れる季節、3年生はとうとう大学受験本番に突入し、2年生も半ば強制的に受験シーズンに突入させられている時期であるが、1年生の俺たちはまだ蚊帳の外。余裕があるかどうかは人それぞれだが、1年生はいつも通り授業を受ける日々を送っている。

もちろん、文芸部の部室を間借りしているSOS団も大して変わってはいない。

ちよつとだけ変わったのは、朝比奈さんの部室に来る時間が少し遅くなったことだ。彼女は2年生だから、大学や専門学校案内や入学の手続き方法、その他学校等で行われる模擬試験についての説明が、時々放課後に行われるからであって、さすがのハルヒも「まあ2年生だからしょうがないわよね」とのこと。それでもわざわざ部屋に足を運んではメイド服に着替え、お茶を淹れてくれるのだから、これ以上嬉しいことは無い。

そんなお茶を飲めるだけでも幸せを感じるのだが、今日はより一層味わって飲む事が出来ると思うと、それだけで更に特別な味がしそうだ。何せ今日はハルヒがいないのだ。

午後最後の授業が終わった直後、ハルヒは俺のネクタイを掴んでは・

「今日はちよつと用事が出来たからSOS団の活動は特になし。みんなにも伝えておいて。明日は今日の用事の結果をみんなにも話すから！」

と言い、ネクタイを俺の顔に放つては返事をする間もなく、そのままローラーダッシュの如く教室を出てしまったのだ。何を言い出すのか冷や冷やしてしまつたが、朗報をこんな形で聞くことになるうとはね。もう少しマシな形で言えないのか。

谷口や国木田と軽く話した後、部室へ向かおうと教室を出ると、ちよつと古泉と出くわしたので、ハルヒが言ったことをそのまま伝える。

「わかりました。今日は僕もバイトがあるので、このまま学校を出ます。朝比奈さんのお茶を味わえないのがちよつと残念ですけど」

「また（閉鎖空間が）発生したのか？」

発生要因があつたつけかと、既に忘れかけている今日一日の出来事をフルに思い出そうとしたが・・・

「いえ、機関のメンバーで集まる会議がありまして・・・まあ定例会みたいなものです。ここ最近の状況を分析して今後の対応を・・・つて。SOS団での会議の方が面白いんですけどね・・・」

白い歯を見せての0円スマイル。そうか、だったらもう毎日その定例会をやつてほしいね。朝比奈さんのお茶はお前の分もしっかり頂いてやるから。

「では、僕も先に失礼します。朝比奈さんのお茶、僕の方も味わつて飲んで下さい。がぶ飲みはダメですよ」

と言ってそのまま古泉も学校を出た。つーか一言多いぞ。

とりあえず一人は片付いた。次は長門だが、あいつはSOS団で何か有ろうと無かろうと既に部屋にいるだろう。朝比奈さんもわざわざ2年の教室のフロアまで行って伝える必要は無い。必要ないなんて言ってしまうと上級生に対して失礼だろうけど。

でも下手に行って伝えても・・・

「わかりましたあくじゃあ今日はこのまま帰りますね」

と言われかねない。それじゃあ朝比奈さんのお茶を古泉の分も味わえない。いや古泉はいいとして、朝比奈さんのお茶を飲んで初めて放課後だろうとまで考えてしまっている俺には、このお茶を飲まずに帰るなどと考えられない。その為だったら夜になっても待つ価値がある(！)

それに、そんな言い訳を抜きにしても、今日はハルヒがいないのだ。ならばあの話が出来る。

あの話って何の話かって？おいおい、忘れてもらっちゃ困るよ。消失の件だよ。

あれはまだ完全に解決していないのだ。完全に終わらせるためには、長門と朝比奈さんの力が欠かせない。ちゃっちゃと片付けるのによい機会だ。ひよつとしたら朝比奈さんもお茶を淹れながら「規定事項です」って笑顔で言ってくれるかもしれない。

外はどんよりとした天気で、今にも雪が降りそうなくらい寒い。出勤日和と言えるかどうかはさておき、この絶好の機会は逃すわけにはいかない。

朝比奈さんのお茶を頂いてからちよつと行って帰って・・・祝杯がてらまたお茶を飲めれば言うことなしだ。

ここまで読んだら分かってくれると思うが、今の俺には下心と言うものが一切ないことがはつきりしただろう。ここ、試験に出るくらいのレベルで重要だ。

「・・・好きなのを好きなときに読んで構わない」

夏休みに入る前だったっけな？長門にそう言われて以来、俺はハルヒ達が部室にいないときは、ここの本棚にある本を読み漁っている。読み漁るといつても、まだ数冊しか読んでいないが・・・

それでも「・・・読んで」と長門から本を渡されたのがきっかけで、長門には及ばないものの本を読むようになった。長門がお勧めするものだと、結構夢中になって読めるのだ。そりゃまあ情報統合思念体から作られたヒューマノイド・インターフェイスであれば、俺を分析して合ったのをデータベースから引っ張り出してくれるだろう。あ、ひよっとして部室にある本はそんな本で埋め尽くされているのか？それって計算ずくだったのか？

ま・・・とりあえず部室で読みふけるとするか。

「よう・・・」

部室に入り、長門に声を掛けてハルヒからの伝言を伝える。

「そう」

そして過去に行く旨の話もした。長門にも関係することだ。これ以上の先延ばしは長門が困るだろう。

「・・・了解した」

と言つて首を縦に振る。

朝比奈さんにはまだ言っていないから、お茶を頂きながら説明して、その足で行こうということでは決まった。後は朝比奈さんを待つだけだ。

「じゃあ朝比奈さんが来たら頼む」

そう言つて、俺も本の世界に入ることにした。

・・・長い沈黙が続く。

どれくらい時が経っただろうか？一時間くらい？それともまだ十分くらい？十分も経ってなかったら・・・それはちよつとシヨックだが・・・まあ俺も本の世界に入ってしまったているから、さすがにそれはないだろう。以前なら耐えられなかった沈黙も、今では少しも気にならないし、苦にならない。成長したもんだな俺も。

それぞれがページを捲る音と、外から聞こえる運動部の掛け声が心地よいBGMとなり、SOS団の部室は本来あるべき文芸部の部室へとその姿を戻した。まあ一時的だし、そもそも俺は文芸部員じゃないんだけどね。

文芸部・・・そうだ。ここはそもそも文芸部の部室だよな・・・ふとそんなことが脳裏に浮かんだ。

そうだよな。SOS団はあくまでここを間借りしている居候のようなものだ。何しろ学校に公式に認められた存在じゃないんだし。存在・・・そういえばあの世界はもう存在していないんだよな。

長門も朝比奈さんも古泉も、宇宙人でなければ未来人でもないし、超能力者でもないあの世界。

眼鏡を掛けた、内気な長門・・・うぶな点は不変だが、書道部に所属している朝比奈さん・・・違う学校に通っているハルヒと古泉・・・

今いる世界と違って、何がどうなるうと一般的なことでしかないあの世界。単なる仲良しグループで終わらせるにはもう遅いと断じ、俺はあの世界を拒否した。そもそもが長門のプログラムに蓄積されたバグとエラーを悪用されて引き起こされた世界だ。

それを消去したことに、拒否したことに後悔はない。後悔は無いが・・・

あの目だけが、ふと見たただけなのに焼きついて離れなかった。

Enterキーを押下した刹那。

すぐにプログラムが起動して周囲が光に包まれたが、そのときに見たあの目・・・淋しそうなあの目だけが今も忘れられないのだ。その他の出来事なんぞ、とっくの昔のことでもどうでもいいと思えてしまっているのに。

あの時は確か・・・谷口の情報でハルヒが違う学校に通っていることがわかった。そして古泉も。

そこで二人と北校の、文芸部の部室に乗り込んで・・・だったが、これがあと数日遅かったら・・・俺はどうしていただろう？

今こうしているように、長門と二人で本を読みまくる放課後を送っていたのだろうか？

・・・まあいずれにしても過ぎたことだ。

残っている問題も、今日で解決する。朝比奈さんが来たら、しっかりと打ち合わせして行けば大丈夫だろう。当時の俺に吐く台詞もまだ覚えているし、それさえしっかり決めればいいんだ。その先何が起きるのかは具体的にはわからないけど、長門がその辺りはわかっているだろうし、むしろ大半が長門の担当だろう。何せ相手は当時の長門と朝倉涼子なんだしな・・・

本を読みながらあれこれ考えてしまい、今開いているページに何が書かれていたのか集中出来なかった。

ふと思いついたことで無意識に数ページ程捲ってしまったようだ。いきなりストーリーが飛んでるのに気付いてページを戻したが、ずっと読み続けていたから目が乾くし疲れた。ずっと姿勢が同じだから体も固まってしまう。

目頭を押さえて目を休め、次に首を回すと・・・パキパキ音がする。ふうっと静かに息をついて辺りを見回す。長門は疲れないのか？な

どと思いながら窓際に目をやると、ずっと同じ姿勢で本を読んでいる長門の姿が目に入るのだが……

俺は思わず声にならない声を出してしまった。驚いたのだ。何か悪いものでも見たのか？

いや、悪いとは言わない。だがそれはないだろうと思ったのだ。

ジョークか？これは長門のジョークか？

いや、長門はどんなことがあってもジョークなんて、そんな概念自体が存在しないだろう。気分転換とか気分の問題などと言ったことも、こいつには存在しないはずだ。

俺が目にしたのは、明らかに違うと断定できる姿だった。

窓際にパイプ椅子を広げて本を読む女子学生。その姿は確かに長門だ。長門だった。明らかに長門だ。

でも違う。長門じゃなかった。長門じゃない長門がそこにいた。

そう、一つだけ違ったのだ。

眼鏡。眼鏡だ。

今、目の前にいる長門は眼鏡を掛けている。

「眼鏡はない方が良い」

そう言っただ眼鏡を掛けるのをやめた長門が、何故今になって眼鏡を掛けている？

やはりジョーク？

否。さつきも言ったが、こいつがジョークを言うわけないのはわかりきったことだ。

気分の問題？

これも否だ。そもそもこいつは気まぐれなどで行動はしない。

……まさか！

俺は周りを……部室内を見た。

すぐに判った。

・・・なるほどね。

そこはSOS団の部室ではなく、れっきとした文芸部の部室だった。原因や理由はわからないが、とにかく俺はあの世界へ帰ってきたのだ。

みんなが普通の人間であるあの世界。

Enterキーを押下することで、存在を拒否したあの世界。

だが何故この世界が？

そして何故俺はここに？

- 2 - (後書き)

消失長門の魅力に負けて、キョンは再びこの世界に戻ったわけですが、戻れた理由、戻った理由は・・・まあありがちなネタから来てます(笑)

後処理って本筋だと(禁則事項)の直後なんですよね・・・
個人的なこと書きちゃうと、体力的にキツイのはって思ったのですが(笑)

ただそれだと服装的にどうかないって思ったりしたので、やっぱりみんな北高の制服姿で活躍して欲しいなどという考えから、後処理はまだ未処理って設定にしてみました。

突如世界が変わってしまったにもかかわらず、俺は割りと冷静だった。

まあ声にならない声を出してしまったけど、前回の出来事が丁度いい予習となったお陰で、すぐに状況を悟れたのだから・・・

それにしても何故いきなり変わってしまったのだ？そもそもこの世界は消えてしまったのではなかったのか？長門よ、まさか未練とかあったりするのか？それとも俺はここで何かをしなければならぬのか？

手に持っている本は、さっきまで読んでいたのと同じだった。ふと菜を取り出してみると、裏にはあの「鍵をそろえよ」のメッセージが書かれていた。意識してみていたわけではないが、さっき挟んだときは何も描かれていなかったような・・・

とりあえず、元の世界に戻る手段はちゃんとあるようだ。そしてその方法は前回と同じ。ハルヒと朝比奈さんと古泉を呼ばなければならぬのか・・・

朝比奈さんは同じ学校だから良いが、この世界ではハルヒと古泉が違う学校に通っている。またあつちまで行かなきゃならないのか・・・

・。戻るのに手間が掛かる。もう少し楽な方法作ってくれよ・・・
「・・・そろそろ・・・かな？」

ふと長門が呟いた。

「え？」

何事もなかったかのように俺は応じた。と言ってもこの先何が起くるのか、予定されているのかまったくわかっていない俺はこれしか言えない。だから聞き逃した振りをして会話を何とか成立させようとした。

・・・ところで俺よ、ちょっと待て。何故そんなところで声が裏返る。裏返りすぎるぐらい今の声は高かったぞ。

「・・・涼宮さんと古泉さんがこっちに着く時間・・・」

「・・・あ、ああ・・・ここまで来るのに30分くらいだっけ？もつと掛かったかな？」

長門が急に世界を変えたからか？俺の声・・・喉が何か変だぞ。

そう思いながら長門を見たが、目の前にいるのは今の長門じゃない。「・・・さつき『今から向かうね』ってメールが着てたの。あなたにも来なかった？」

眼鏡の向こうには、ハルヒと古泉が来るのを待ち遠しく思う少女の目があった。一見今までの長門と変わらないように思えたが、目の輝きが・・・それはもう嬉しさが漂っているような、そんな感じの目だった。顔全体の表情は変わらないのに目だけが違っていた。

さて、メールなのだがどうだろう？一応こっちでも繋がるのかな？前回、こっちの世界にいたときの俺は、携帯は一度も使わなかった。まあそれどころじゃなくて携帯で何かをなんてのが頭に無かったのもある。最初から携帯が使えるとは思っていなかったからかもしれないが。

そんなことを考えながらポケットから携帯を取り出そうとしたが・・・

今気付いた。

この世界はまた違う世界なのか？

また新たなエラーやバグの蓄積で世界が改変されてしまったのか？

俺は普段、携帯をポケットに入れている。するといつの間にもここに無いたとわかれると落ち着かないのだ。無意識にブレザーのポケットに入れたときも、無いと気付くと一瞬慌て、見つかるかほっとする。別に携帯じゃなくても、財布でも定期入れでも何でもいい。みんなもそんなことがたまにはあったりするだろう。

だが、携帯がポケットにないという非常事態よりも、更なる非常事

態である事がわかったのだ。俺・・・気付くのにかなり時間掛かってないか？というかこれ、本当の出来事か？

動揺を必死に隠しながら、さりげなくカバンを手にして中を漁ると・・・携帯はそこにあつた。携帯本体とその中身まではどうやらあまり変わっていないみたいだが、今日の日付で一件、ハルヒからのメールがあつた。内容は・・・

『キヨ子！今やっと授業終わってこれから一姫とそっち向かうよ！有希ちゃんとお茶用意して待ってなさい！あと有希ちゃんに言うの忘れたんだけど、途中でお菓子買ってくるからー！』

このときの俺は、メールは主要な部分しか読んでいない。何よりも今の自分がどうあるのかという疑問符で、自分の視界が殆ど遮られてしまっているのだ。

えーつと・・・以前この世界に変わってしまったとき・・・俺は男だったよ？そのお陰で長門や朝比奈さんと関わってたら、ありがたくなんぞ全然ない厳しいツッコミを散々頂いたのは今でも覚えている。ましてや男でなければ、途中でジョン・スミスの名も使えないだろう。

未だ手にしている本がようやく邪魔だと気付き、長机に置く。あれ、何か机が高くないか？

今になって気付く事が多すぎて頭が混乱しそうである。ここで変な行動を取ったら、また何が起きるかわからない。

「そろそろだろうけど、お菓子買いに行ってるみたいだよ」

と、とりあえず長門にメールを見せてこの場をやり過ごす。

「・・・そっか」

「来るまでの間にちよつと手洗おつと・・・」

俺はそれとなく携帯をポケットに入れつつ、カバンからタオルを取り出し、部室を出た。

長門・・・お前俺に何か恨みでもあるのか？何でこんな状態なんだ？

パイプ椅子から立ち上がった。色々と自分の状況に確信を持てるようになってきた。いつもより低い位置にある自分の視界、視点。体の感覚。今の俺がどういう状態なのかがはっきりわかったのだ。何故か、理由や原因は全くの不明だが・・・俺の体が女の体になってしまっている！

急ぎ足でトイレに向かう。男子じゃない、女子だ。

男子トイレは左にあり、女子トイレは右にある。つい左に曲がってしまいそうになるが、思い切って右に曲がり入る。誰かいなか不安だったが、旧館に来る生徒は部活に参加する生徒くらいで、人はそうそう来ない。女子が多く所属する部もあるが、美術部は基本的に美術室で活動するし、吹奏楽部は同様に音楽室で活動する。部室は言わば荷物置き場のようなもので、部室で活動する部はそう多くない。

まずは洗面台の鏡を見る。そこにはポニーテールの女子高生の顔が写った。

うわぁ・・・何と言うか・・・

髪を触ってみると、普段セットして覚えている感覚よりも艶やかで細く、サラサラしている。強く引っ張ってみたが、地毛である事がよくわかった。

着ている服も服だった。特に下の方は肌が剥き出しになっている。多くは語りたくない。

次に個室に入って、色々と確認した。

したくなかったが、予習しておかないと何も出来ない。男のつもりで行動しようものなら、へまをやらかすのは目に見えたからだ。

個室で何していたかは、朝比奈さんの言葉を借りるなら「禁則事項」ってやつだ。

どうしてもという奴の為に一行でまとめておくと、筋肉だったはずの部分が脂肪になっており、肌もいわゆる柔肌というやつだ。これ

だけで勘弁してくれ。

ひとまず・・・俺は長門の蓄積したエラーやバグやらによって、消えたはずの世界に切り替わった挙句の果てに、俺自身が女としてここにいるのがわかった。

何故なのかは全く不明だ。ここにいる理由も、女である理由もだ。

とりあえず身嗜みだけ問題ないかチェックして、部室へと戻った。

- 3 - (後書き)

とうとう性転換ネタに入りました(笑)

当初は性転換させるつもりなんぞ無く、鶴屋さんを登場させるストーリーにしていたのですが、何か話がしっくりこなかったのでボツとなりました。

天候も、あつちの世界では晴れてて部屋はその陽射しで暖かく、でも外は北風で葉が落ちた木の枝が揺れている・・・そんな光景だったんですよ。

でも、みんなで集まって身も心も温かくなっている＝寒さを忘れさせる雰囲気作れないなと言うことでボツに。

先のことをあまり考えず、前の分に矛盾しないようにしつつ勢いで書いています。

- 4 - (前書き)

ちよつと強引かもしれませんが、やつと書けた4話です。

体裁など細かい部分で気になる部分がなくもないので、そこは今後修正を入れるかも知れませんが、
・ ・ ・ o r z

部室に戻ると朝比奈さんがいた。

挨拶もそこそこに席に着くが、やはり未来人ではなく、現代人の朝比奈さんだ。ホクロがどうなっているのか気になったりもするが、まあ無いか普通のものだろう。今日は書道部の活動は休みだと言う。だからこっちに顔出せたと言い、久しぶりに会うかのように長門と会話をしている。最初こそ本当の世界と同様ビクついていた朝比奈さんだったが、内気な長門を解き解すかのように話しかけている。こっちじゃ見られない光景に目を奪われた。

俺はそんな光景を横目に、先ほど部室に戻るまでの状況を整理した。

いつの間にもやら世界が変わって、一度訪れた世界へとやってきた俺。だがそれだけに留まらず、俺自身もとんでもない変貌を遂げている。そしてそれが前からそういう状態であったとする、長門や朝比奈さんの言動。

部室に戻る前に、俺は教室の方がどうなってるのか気になり、一旦教室のある校舎へ向かった。

既に放課後だから教室には誰もおらず、自分の席であろう窓側の後ろから二番目の席を見ると、そこはやはり俺の机だった。

いつもに比べれば整理整頓されている机にはびっくりしたが、そこは俺が女であるということからだろう。だが、教科書やノートとセツトで置きっぱなしにしている筆箱には、中学の時から使っているシャーペンが入っており、消しゴムはなんと・・・前に無くしたとき、ハルヒから分けてもらったやつだった。

恐らく辻褄が合うように設定が加えられているだろうが・・・
ついでに後ろの机も見てみる。後ろの席はハルヒではなく、朝倉涼子の席なはずだ。朝倉の私物の何かが出てくると思っていたのだが、

こっちは空っぽだった。紙切れ一枚も入っていない。

谷口と国木田の机も調べる。二人はどうやら男のままのようだ。国木田は元々しつかりしている方の奴だから、机の中は男子なりに整理されていた。が、谷口の方は・・・元の世界以上の混沌とした空間を、机の中で再現しているようだった。

とりあえずこのときにわかったのは、俺だけが女になっているということだけだった。

後ろの座席に誰が座っているのかは結局わからなかった。いたとしたら朝倉だろうが、朝倉は長門によって消えたはず。再びいたとして、それは普通の人間なのかどうかは見当がつかない。

だが、現時点でいないのでは仕方が無い。出席簿を見たかったが、放課後じゃもう日直が職員室に返却してるだろう。これ以上の手掛かりは期待できなかつたので、改めて部屋に戻ることにした。

それにしても歩きにくい。ヒラヒラするわスースーするわであまり良い感じしない。いや、むしろ気持ち悪い。生まれつき女で慣れていれば、少しも気にならないだろうけど、いきなりでは無理がある。恥ずかしい以外に何が思いつく？いくら体が完全なる女性だと言われても、本来男であるという意識がしつかり残っているとは違和感しか生まれない。

女になりたいとマジで思ってるやつにマジで代わってあげたいよ。代わってあげるから何とかしてくれ・・・

・・・っと、ここまでが部屋に戻るまでの出来事で、状況も整理されたから次へっと。

・・・とにかく、ここでは何がどうなっちまってるんだ？どうも俺が女であるのは前からのようだったし・・・朝倉はやっぱりここにいるのか？

長門のような宇宙人ならば、瞬時にこんな状況のデータ整理なんてお手の物だろう。プログラムで矛盾点があったとして、それまた別のプログラムでロジックを組み直しては辻褄を合わせられるだろう

し。一人一人の記憶もそうだ。でも俺は低空飛行で着陸・・・いや墜落すれすれの頭だ。情報の整理が瞬時で済むわけが無い。むしろ混乱を極めるだけだ。

無い頭をどうにか回して、問題点を挙げる。

まず一つ、俺は何故ここにこんな格好でいるのかだ。

理由の一つは、長門のためだと何となくわかる。本来なら既に消えてなくなっている世界が、まだ健在なのだ。ということは、残されていることに何らかの理由があり、原因があるのだろう。

次に、ここで何をすれば良いかだ。そのために長門は世界を変えたのだから。

目的・・・目的・・・

二つ目にして最大の謎。俺はここで何をすれば良いのだ？このままじゃ一旦戻って聞かなければならなくなる。

元の世界の長門からの唯一の情報は脱出プログラムのみだ。プログラムの起動には鍵が必要で、その鍵はまだ揃っていない。

揃えばわかるのか？でも長門よ・・・それは世界を変える前に言うて欲しいものだ。いきなり変えられたって困惑する以外に何が出来

・・・ふと脳裏に

「これもバグとかエラーによってこうなってしまったんじゃないか？」

と言う考えが浮かんだ。

どうすれば良いのかわからずじまいなので、二人の会話に参加しながら鍵が揃うのを待った。このときの俺は、一旦出直すしかないやと諦めたのだ。こんな状態で何日も過ごしたくない。ここでの俺が

どうやって過ごしているのかもわからないような状態で過ごすなんてのはちよつとゴメンだ。

しかも戻るのだったって一手間二手間掛かるんだから。

長門の脱出プログラムは、修正が施されたかどうかは定かでないが、少なくとも前回に成功を保証できないという断りを入られた。そして、朝比奈さん（大）は「既定事項」と言ってくれたけど、3・

・4年前の七夕の日に戻ってから、更に時空震の力で戻ったのだ。

そういえばあのときは冬服だったから、汗だくできつかったけなあ・・・しかも上履き、靴なしで行動だったし、刺されたし。

次はどの時代に飛ぶのやら・・・そのときは頼むから男に戻っててくれよ・・・

二人の会話にうまくアドリブを通して、色々と情報を得る事が出来た。

こちらの世界のSOS団が出来たきっかけは、長門と同様図書館で俺と長門がハルヒと古泉に席を譲ってあげた際に、話が合うようになったのがきっかけで、それ以来ちよくちよく会う様になり、今では北校に文芸部が発行する機関誌のお手伝いという名目でお邪魔しているのだという。

一方の朝比奈さんは、ここでの俺と長門が出会ったきっかけとまったく同じで、本の貸し出しをどうすれば良いのかわかっていなかった朝比奈さんに、ハルヒが図書カードを作ってあげたのだ。それで5人で集まるようになり、書道部に所属する朝比奈さんは、空いた日に文芸部に足を運んでいるというわけだ。以前、俺が強引に連れてきてと言った経緯とは全く異なっていた。

これまた辻褃合わせで作られたものなのだろうが・・・こうもがらりと変わっていると、戻る方法も大丈夫なのか・・・少し不安を覚えながら、鍵が揃うのを待った。

それにしても自分の声が自分の声と思えないから、単純に話すだけで結構疲れる。元から女であれば違和感も何も感じないだろうけど、

いきなり変わってしまったって誰だつて戸惑うさ。

特に一人称には気を使った。会話中、思わず自分を『俺』とか言っ
てしまいそうだったが、できる限り一人称を使わないようにした。
自分をどう呼ぶか、たぶん「あたし」で良いと思っっている。でも、
元の世界に戻ったときに不意に言ってしまったは大変だ。もう目も
当てられない。必死で一人称を使わなくて済む様に台詞を構築しな
がら会話に参加する。

他人に気遣うんじゃなくて自分にここまで気遣う会話ってあるだろ
うか？

元の世界の長門のようにずっと、何があっても本読んてるほうが良
いのかもな……

ふと、世界が変わっても見ていなかっただ空を見してみる。世界は変
わったが、天気は変わっておらず、さつきと同様のどんよりだ。

「……雨、降らなければいいんですけどね」
俺が空を見ていたのに気付いて、朝比奈さんも空を見つめながら言
う。

「これだけ寒いと雪降りそうですよね」
元の世界でも思っていたことを言う。外では運動部が寒い中練習に
励んでいる。

「……二人遅いですね」
学校がどこにあるのか知らないのだろうか？長門は二人を待ちわび
ている。

「雨振るの待って相合傘で来るのかな？」
二人に聞かれたらどんな反応を示すことやらと言わんばかりに言っ
てみる。

「アハハ……でも古泉さんはあなたと並ぶと良い感じのコンビに
見えますよ」

「え……そう？」

俺かよと思っただけど、顔には出さず返す。朝比奈さん、今のはちょ

つと頂けませんよ？

「・・・でも似合うと思う・・・」

羨ましそうな感じで言わないでくれ・・・いつでも代わってやりたいが・・・こっちの世界の古泉も嫌味だよな・・・合わないような気もするが。

「・・・同じ学校だったらいつも一緒に楽しくしてそう」

おいおい、長門よ。俺と古泉でって・・・しかもコンビ？ペアとかカップルじゃなくてかい？何かその表現に何か引つ掛かるな・・・二人の会話をよそに、俺は椅子に戻って携帯を取り出した。ひよつとしたら何かしら重大な情報があるような気もしたからだ。

ハルヒからのメール。

授業終わったからこっちに向かうと言う旨に加えて、お菓子を買いに行くから長門に伝えるようにという内容・・・

この時点で分かった。このハルヒからのメール・・・古泉の名前がない。一姫？これが古泉か？いや、姫ってなんだ？姫って？

アイツの名前は一樹だよな・・・まさか！？

更にわからなくなってしまった。

長門、一体お前は何をしたいんだ？何を求めている？何を必要としている？いくらなんでも謎が謎を呼びすぎだ。今からでも説明が欲しいところだ。無理を承知でも言語情報で表現して欲しい。

何とかなるだろうなんて楽観的に見ていたが、そうも行かなくなりそうだ。

俺がここにいてってことは、長門では解決出来ない何かの問題があるわけだ。その役割が俺なだけだ。まあそれは良い。けどどこで何をすれば良いのかわからない。たぶんこの部屋のどこかにヒント、もしくは答えがあるはずなんだけど・・・ノーヒントではさっぱりだ。

ハルヒがとかく力づくで構ってくるものだから、服が破れていないか心配したが、制服は意外にも頑丈で、しわもそんなに目立たなかった。

髪が乱れなかったかと思っただが、どうやら大したことはなさそうだし、いちいち直すのも面倒なのでそのまま席に着く。すると今度は古泉が・・・

「私が直しますよ」

「いや、別にいいって・・・」

「私より髪質良いんですから、今直さないとダメですよ」

朝比奈さん、そこで火に油注がないで。

「いや、食べてる真つ最中だし」

何とか言い訳探して言うってみるも、古泉はブラシを取り出し、毛先から髪を解かす。

「折角だからツインテールにしたら？」

ハルヒ。俺の髪で遊ぶのは勘弁してくれ。だったらお前がツインテールにしるよ。

「待て、ポニーテールだけは譲れん！」

「縦ロールもいいですよね」

「話聞けー！遊ぶな〜！」

この際、もう長門が何故こうしたのかとかどうでもいいから、Enterキーを押したいと思ったのだが、まだパソコンには電源が入っておらず、画面も真つ暗なままだった。

もう何が何だかわからなくて、頭はスポンジになりそうな状況だった。

世界は変わるし性別も変わる。そんな中、立場もぶっちゃけ朝比奈さんが立つべきであろうポジションに収まってしまっているのだ。女5人の部室は、俺以外最高潮に達していた。

ハルヒは座っている俺の後ろから抱きつくような格好で、長門は古泉が膝に載せる格好で座つての談笑である。

それを楽しそうに見比べる、制服姿の朝比奈さん。ハルヒと古泉のギャップが激しすぎて、動く度にこんな奴だったかと疑いたくもなかったが・・・俺が女、すなわち同姓だからこの程度は別に気にしないってわけだ。確かに女同士仲良いと、手つないでたりつてのあるもんな・・・朝比奈さんも結構ハルヒに絡まれてたし。

こっちじゃ他校の上級生だからかどうかはわからないけど、いつものハルヒに比べればちょっと遠慮してるよな。タメ口なのはこっちでも変わらないけど。

それにしても女子の会話って凄いわ・・・とにかく男子の会話に比べると、パワーというかノリが凄いのだ。話の展開も早い。お陰で頷くのがやっとの状態だ。考える暇も無い。女のカンって言葉あるけど・・・それってこういう会話で養っているのだろうかと思ってしまう。他愛ない会話なんだろうけど、男の意識がある俺は兎にも角にも逃げ出したいくらいの状況だった。

しかし何のお眼鏡に適ったのか・・・ハルヒと古泉から逃げたくても逃げられない。ハルヒ達が到着してから既に1時間半は経った。授業が終わって2時間を回り、外も暗くなってきた。

そろそろ帰りたい・・・家に、それもホントの世界の・・・パソコン、早く勝手に起動しやがれ。

そんな願いも虚しく、校舎が閉まる時間が近づいたので後片付けに入る。次回はいつ集まるかと話しながら、洗ってきた急須と湯飲みを片付け、文芸部のパソコンにちよつと目をやるのだが・・・5人が揃ってからのというものの、一向にパソコンには電源は入らない。電源はしっかり刺さっているのだが・・・

やはり俺と古泉が女では条件が違うのか・・・じゃあどうすれば戻れる？

長門の家・・・いや、何の変哲も無いマンションだったな。あの時も朝倉涼子が登場しただけで、他には何も無かった。

どうすれば良い・・・どうする？

そうこう考えているうちに、ハルヒが解散を告げる。

「じゃあ本日のSOS団会合は終了ー！」

また集まりましようということ、解散となった。残りたかったが、これ以上残ることは出来ない。ましてやハルヒと古泉は違う学校の生徒だ。話の上では、来週空いてたら集まると言うことだが、それでは駄目だ。長すぎる・・・

どうにかならないか・・・と、そのとき俺のケータイが鳴り出した。ポケットに入れたままだったからすぐ気付いたが・・・

「ふう〜ん、キヨ子はケータイをポケットに入れてるのね」

ハルヒが何やら不適な笑みを浮かべて言うが、俺は無視して誰からの電話か見る。長門、今度はケータイからか？とちよつと期待して画面を見たが・・・

残念。谷口だった。

「誰からの電話ですか？もしかして彼氏？」

女になつても0円スマイルの古泉が興味津々で聞いてくる。女になつてもその性格かよ・・・。構うのにもう疲れたので、本当なら出なくても明日で大丈夫であろう谷口からの電話に出る。

「もしもし？」

「お、キヨ子！突然ですまねえ。実はちよつと頼みたい事があった。電話したんだけどさ、今大丈夫か？」

「もう学校出るよ？」

「まだ学校だったか！ちょうどいい！帰りはお礼に・・・晩飯は無理だけどコーヒーか紅茶の一杯にケーキ一つ奢るからさ！一つ頼まれてくれないか？」

谷口、ちよつと焦ってないか？まあ谷口が焦ることっていうのは、俺からすればちつとも大したことない、かわいいかわいことなんだけどね。

「男の声ね〜キョン子もスミにおけないわね〜」

ハルヒがいつの間にか肩に腕を掛けてくる。おい、話し難いからやめてくれって・・・

「あんたのことだから・・・W A・W A・W A・W A・忘れ物〜じゃないの？」

ハルヒの腕を解きながら、谷口の代名詞でもあるあの歌を歌って言うてやった。谷口からこんな時間になつての電話だと、基本的にそれしか浮かばない。

「ご名答。机にある教科書をちよつと取りに行ってもらえないか？俺これからそつち向かうからよ。正門で待ち合わせでどうだ？今は国木田の家だからそんなに掛からねえと思うんだけど？」

このとき、何かを閃いた時によく表現される電球が灯るシーン。それが俺の頭上で見事に閃いた。

確証は無いが、こうなればダメでもとどだ。それに口実はいくらでもある。この世界からの脱出の成功率は・・・考えている暇はない。高いように見えるし、低いようにも見える。でもそんなのはモノの見方一つで簡単に変わってしまう。自信を持っていれば高いと思えるし、慎重に思えば低く見えるのだ。

ギヤーギヤー喚きながら悩むのは性に合わん。

このときだけ、ちよつと女の得を感じたりもしたが、せつかくの得する権利を一つくらい行使させてもらっても良いだろう。

「谷口ー。今ね、こっちは5人で文芸部の部室にいるの」
「うむ。」

「他校の生徒も客として来てるからさ、国木田と二人で文芸部の部室に来て。場所は旧館の最上階。あとはプレートがあるからわかるよね？」

「正門でいいんじゃないか？」

「お客もいるの。寒い中待たせるなんてのは失礼じゃん！」

「先に帰しちゃえばいいじゃん」

「あたしの周りにいる人も、ケーキって言葉は聞き逃さなかったわよー。あたしだけ得つてのはちよつと悪いじゃーん」

「お・・・お前！」

「あたしのせいじゃないわよ？あんたの声、すっごい通るんだから部室に響くくらいよ？」

「・・・う~~~~わかったよ。わかったわかった！文芸部の部室だな？」

「男があんた一人だけなのもあれだからさ、国木田も連れてきて」

「はいはい、わかりましたよ。じゃあ教科書頼むぜ」

「あ、何の教科書だっけ？」

「何のつて・・・課題出たのは一つだけだろ？英語だよ。あのくらいしか課題出る授業ねーじゃねーか」

「あーそっか、てつきり忘れてた」

「ったく・・・お前の後ろの席に移動したいよ。あの辺って今まで当てられることってなかったよなー」

「まあまあ。とりあえずちよつと取りに行くから、さっさと来なさいー！」

「はいよ、じゃあよろしくー」

通話を切り、カバンは長机に置いてみんなに告げる。

「ちよつと男子の忘れ物取りに行くから、待っててもらってもいい？外じゃ寒いしさ。」

「……え？でも……もうすぐ閉まつちゃうよ」

急展開でもないのに唖然とする長門。捨て去られた部分がここでは際立ってるよなあ。

「大丈夫。外もう暗いし。こちらは平気でも長門と朝比奈さんが心配だもん」

「そうですね。この方が電気あるから明るいし、風は冷たいからこの方が良いかもですね」

古泉も賛同する。やっとこっちの古泉も役に立ったか。古泉だけ男のままだったらどうだったのだろう？「僕も護衛で同行します」なんて言われたら……本当の女なら喜ぶかもしれないが、俺は身の危険しか感じないな。今の女の状態でも身の危険を感じるのに。まあ他校の人間だから同行させるわけにはいかないのだが。

「うん、客を外で待たせるならとびっきりの晚餐を用意してもらわないと割が合わないもんよね。ましてやケーキのおまけがつかなくて、キョン子グッジョブじゃん！」

ハルヒも俺に親指立ててポーズ。ここまではぼ計算通りだ。

「じゃあキョン子さん、暗いから私も行きましょう。長門さん、二人と一緒に待っててもらえますか？」

「う……うん……気をつけてね」

ということ、朝比奈さんは俺が教科書を取りに行くのに付き合ってくれた。

自分のと谷口の教科書を手にして部屋へと戻る。こっちの世界の朝比奈さん……長門の前では先輩というか上級生ぶりを発揮していたが、やはり元の世界の朝比奈さんと変わらない。折角付き合ってくれたのはありがたいが、廊下の途中から先が消灯されて暗くなると、途端に足がすくんでしまい、しまいには俺の腕を掴んでずっと離さないのだ。たぶんまだ電気ついているから大丈夫だろうと思ってるのだらう。

いやいや朝比奈さん、もうすぐ閉まる時間なんですよ。だったら教

師が消灯しに行ってるでしょうって。

完全に怖くなつて腕を掴んだまま離さない朝比奈さんは、動くのもやっつとだ。これ・・・元の世界でも起きないかな・・・？この体じやなくて元の体で感じたいものだ。

ようやく部室に到着。部室には帰りの準備が万端のまま待っている3人に加えて、谷口と国木田の姿もあった。

「サンキュー！助かったぜ！」

「谷口・・・あなたの机の中どうにかしなさいよね！」

「すぐ見つかっただろ？」

「見つかるわけねーって。これかな？って引つ張ったら床に全部ぶちまけちゃったよ」

「マ・・・マジで!？」

いきなり慌てだす谷口。ほほ〜こりや何か裏があるみたいだな。

「ひよつとして〜キヨ子とは別に彼女がいたりして〜？」

「違う!」

「付き合ってないって!」

ハルヒのニヤリとした問いに、俺と谷口で互いに否定する。勘弁してくれ・・・俺は勿論。この作者だって、んなの興味ねーんだよ。

「まあキヨ子は古泉とが一番ベストな組み合わせかなあ？」

何をプロデュースしてる。そっちにも興味はないぞ。

「そんなことより谷口。約束だぞ。ケーキつてのは今日か？」

「忘れないって。明日でどうだ？」

「みんな待たせたんだぞ・・・」

「・・・くっ・・・わーっつたよ！ケーキとお茶ただだぞ。それ以外は自腹だからな・・・国木田・・・金融支援求む・・・」

「ふふっ・・・だと思つたよ。むしろ僕はもう覚悟決めてた感じかな」

「かっ・・・かたじけない!」

裏返つた声で謝辞する谷口。まあ俗っぽく言えば、今日という日が

悪かったんだ。普段であれば長門、良くて朝比奈さんの三人分で済んだのにな。

「ゴチになります〜！」

「ご馳走様です」

谷口の潔さが気に入ったのか、谷口の肩を叩いては何を食べようかと盛り上がるハルヒと、レディーよろしく、古泉はもう一人、国木田にスマイルを放つ。

長門も朝比奈さんも申し訳なさそうに「ありがとうございます」と礼を述べた。

谷口はこんなはずじゃあと、予定外の出費に肩を落とし、国木田が「まあまあ」と慰める。まあ俺と古泉は本来男なのだが、ここじゃあ元から女として成立している世界だ。俺はともかく、古泉はあれでかなり美人だし、朝比奈さんもいるんだ。長門だってハルヒだって決して可愛くないわけじゃあない。悪いもんでもないだろう。

確かに出費は痛いだろうが、俺が毎回支払わされている状況に比べればそんなの痛くないぞ。何せケーキとお茶の限定なんだ。俺なんか前菜からメインディッシュ、デザートに至るまで負担してたんだぞ・・・まったく。そんなんで落ち込むっての。

貸し借り抜きで朝比奈さんと長門を近くまで送るオプションつけてやるうか？

ピ

ふと、何かの電子音を耳にした。何の音だ？

時報？

いや、今の俺は時計をしていない。ケータイは時報が鳴るように設定していないし、ましてや時間は既に6時を回っている。鳴るように設定したとしても、時報はとづくに鳴り終わっている。

誰かからの着信でもない。ワン切りでちょっとだけ鳴るといのはあるけど、あーいったのはウザイだけなので、電話帳に登録してい

る電話以外は受け付けないようにしている。勿論、非通知とかは無視だ。非通知は勿論、通知出来ないようなところからの電話っていうのは120%怪しくて当たり前。怪しくない電話なんて存在するわけが無い。

良い電話ですなんていうのは、その前に「自称」の二文字が確実に、レットルの如く自動で貼られるのは言うまでも無い。

まあこれは元の世界のハルヒが言っていたことであり、かつ事実な
んだけどな。

・・・

・・・

・・・ビンゴ！

ダダッと部室の奥へ行き、パソコンの画面を見る。

パソコンの電源が入っていた。ハードディスクも回転を始め、BIOSの画面から左上にカーソルが点滅する状態に変わる。すると、あの求めていた状況が発生してくれた。やはり予想通りだった！

> Yuki・N あなたはまた、わたしでないわたしのいる世界にいる。しかもあなたもあなたではない状態。

長門だ！やっときたか！遅いぞ！ああそうだ。今の状態はお前の言うとおりだ。正にその通りだ。俺も俺じゃない。まあそんなこと言ったら、ここにいるみんながみんなじゃない世界なんだろうけどな。だがそんなこと言ってしまうと収拾がつかなくなる。話を進めよう。

> Yuki・N 当該情報に想定以上の齟齬が発生している。極め

て危険な状態。

「みんな動かないで！」

悲鳴のように叫んだ。本能だけで行動に出てしまっていた。必死でみんなの動きを止め、続きに入る。

「何だよ？どうしたんだよ？」

「何があつたの？」

「キョン子？どうしたの？」

ええい、動くな、黙れ。いちいち答える必要は無い。うるせえぞ。

> Yuki・N そちらのキーボードでも入力が可能。現状を知りたい。

読むだけかと思っていたが、それだけでは向こうも情報を知る事が出来ないようだ。

だけど長門。当事者であるこっちの方が知りたい事が多くて困ってる。とりあえず、部屋にはハルヒ、長門、朝比奈、古泉と谷口、国木田がいて、俺と古泉が女になってしまっていることを伝える。

それと同時に、このPCが起動しなかった理由に、俺と古泉が女になってしまっているのが原因かを尋ねた。

> Yuki・N そう。

やはりか。男二人、女三人いることが条件なのか。最早SOS団を語る土台のようなものだもんな。

> Yuki・N 鍵が揃う条件が満たされていなかった。不審に思い、こちらで条件を変更し、あなたと程度に寄らず、関わりのある男性が二人存在することに変更した。

なるほど、そういうことか。じゃあ起動していない間にもせつせと働いてくれてたってわけだ・・・
ありがたいことこの上ないぜ！

> Yuki・N 今、こちらでも読み込み用プログラムを起動して状況を把握した。かなりのレベルと範囲で情報の齟齬が発生している。緊急脱出プログラムは、現時点で起動してしまうと、どのような状況が発生するか情報統合思念体でも予測が不可能。これより、現状に合わせた緊急改修を行う必要がある。少しの間、待機するよう要請する。

ああ頼むよ。でも急いでくれ、悪いがこっちは5分ももつかわらない。

それにしてもそれって何が原因なんだ？

> Yuki・N 本来なら、あなたが以前に実行したプログラムで今あなたがいる世界は完全に消去されるはずだった。でも現時点で原因は不明だけど、消去対象データの一部に巧妙なプロテクトが掛けられており、如何なる修正プログラムをもつてしても変更が効かなかった。今回はエラーとバグの蓄積によるものでないことだけは判明している。

そうか、なんとなくわかった。とりあえず話はもういい。改修したプログラムを早く実行したい。

しかし、俺はここで何をすべきだったんだ？

> Yuki・N わからない。理由が無ければあなたこそちらに行くことは決して無い。わたしもあなたをそちらに行かせるようなこととは、確たる理由が無ければしない。

わかった。わかったよ。あとは戻ってから直接話した方が早そうだ。あとどのくらいでお前のプログラムは実行出来るんだ？

> Yuki・N あと47秒。でも、成功は保障できない。

構わないさ。いつまでもここでジタバタしているよりはマシだ。長門が修正を入れてくれたというなら、少なくともともんでもない時代や場所へ飛ばされるとは思えない。俺は元の時代の長門を信用する。女のまま飛ばされるのはちょっとやめてもらいたいが、五体満足で元の男の姿で戻れるというならどこだっていい。時間が多少ずれてたって問題はない。

> Yuki・N 改修完了。

よし！

「ねえ、キヨ子・・・何やってるの？早く行かないと閉まっちゃうわよ？」

ハルヒが不機嫌な顔で俺を呼ぶ。古泉も顔をしかめている。元の世界ならこんなことでも目を細めて0円スマイルのお前が・・・似合わないぜ。

他も何をやってるのかわけわからず、どうすれば良いのかわからない状態だ。長門と朝比奈さんは不安そうな顔してるし、谷口と国木田も啞然としている。

> Yuki・N 緊急脱出プログラムを実行します。実行する場合はEnterキーを。実行しない場合はその他のキーを押して下さい。Ready？

色々思うところはあるのだが、もうこのタイミングであれこれ語るのももう止めよう。ケーキをご馳走になれないのはちょっと残念か

もだが、まあそれはいいや。もし機会があったら、ハルヒに谷口を八メてご馳走になればいい。

この後、戻ったところではい終了とはいかないのだ。長門と一緒に片付けなければならぬ問題があるのだ。たぶん山ほど。下手したら朝比奈さんの力も、また借りなくてはならないだろう。はつきり言って暇はない。

じゃ、行くぜ。

前回事業、迷いは全く無かった。何故かって？決まってるだろ。戻るべき世界と戻る方法が目の前にあるからさ。俺はこの世界に身も心も売ったつもりは全然ない。

確かに一度や二度、こんなことを考えたことはある。

長門からの救いの槩を発見できずに、こつちの世界に居続けてたらどうなっていたのだろう？とか、Enter以外のキーを押してたらどうなっていたらどうか・・・ちよつとした怖いもの見たさのレベルでだ。すぐに考えるのに飽きて止めてたが。

この世界も実は楽しいのかもしれない。ましてや今の俺は女になっちまってるからな。

新しい発見の連続だと思う。でもな。男である意識がハッキリしていては、毎日が耐えられないだろう。ハルヒと古泉の絡んでくるのも耐えるのがやっとなさな。

悪いが、そういうのはその気のある人間でやってくれ。俺にはそんな気がまったくないんだ。

不意とはいえ、一人称に「あたし」を使ってしまったのはちよつと悔やまれたかな。

俺はちよつと苦笑気味に歯を見せながらみんなを見る。そして・・・

「今終わるさ」

みんなにそう言って、俺は小さく細い人差し指でEnterキーを

押した。

次の瞬間、画面からまばゆい光が発され、部室は光に包まれた。
そして衝撃。

- 5 - (後書き)

筆者は男です。だから女については、はっきり言って疎いので、多少想像が入ってるかもな部分のご容赦を(汗)

ちよつとキヨン子がツンになってるのが伺える話にしてみました。

まあ男のときもツンじゃんって言ってしまえば終わりかもしれないが(笑)

・ 6 ・ (前書き)

ちよつと間が開いてしまいました、その文話が複雑化してしまつて・・・何だか長くなりそうなきがしてます・・・
そろそろ終わらせようって思つたのにorz

るのかどうかはわからないもんな。帰る手段があるのに、ミッシェンがあるからと「禁則事項です」って言われたらどうする？

一気に余裕が出来た。そんな冗談をあつさりと思裏に浮かべられるんだからな。で、長門に言われたのが本当か、まあ本当なんだろうけど、俺の今の体がどうなっているのか確かめた。

さっきと同じ制服姿だった・・・と言ってもセーラー服ではない。いつも着用している男子用のブレザーだ。体の感じも今までの男のものとは変わらない。髪も普段の形だ。どうやら体は無事に戻れたようだ。

ふう・・・思わず溜息を大きくついてしまった。いや、安堵の溜息ってやつさ。なれないこと尽くしだったしな。

ひとまず落ち着いた俺は、長門に良く似ている男に目を向けた。ここが長門の家なのはわかった。体も、いつかはまだ聞いて確認しなきゃいけないけど、元の世界に戻れたことは十分にわかった。

・・・だけどあなたは？
「私の兄」

長門が即答した。

「兄？」

「説明する・・・座って・・・有希、お茶と菓子を・・・」

「あ、久しぶりですけど私が淹れますよ」

男の名は長門優貴。名前はゆづきと読む。ここからは長門（兄）、長門（妹）と表現しよう。

長門（兄）の説明によると、妹が生み出される前に造られた、対有機生命体コンタクト用ヒューマノイド・インターフェイスで、簡単に言ってしまうと・・・兄はプロトタイプ。妹は量産先行型なのだそう。まあ生み出された順番からしても立派な兄妹であるわけだ。そして、今の俺がいるここは、確かに歴史や情報が改ざんから戻された、いつもの元の世界なのではあるが、日付が俺がいたときよりも三週間進んだ時期だという。つまり、ここには二人の俺が存在していると言っただ。

長門（兄）が俺に座布団を勧め、長門（妹）の代わりに朝比奈さん（大）が俺の分のお茶を淹れてくれる。手つきはメイド服を着て淹れている時と何ら変わらない。そして頂く一杯のお茶。

ああ、まだゲームクリアしてないけど、ここでの一杯はありがたいヒットポイントの回復ですよ。

「お茶を淹れるなんて久しぶりです。あの頃は毎日こうやってましたっけ・・・」

懐かしむように急須を見つめ、長門兄妹にも新しいのを淹れる。お茶役を持っていかれた長門（妹）は、キッチンからみかんと煎餅を持ってきてくれた。

宇宙人と未来人のもてなしを受けつつ、本題に入ることにした。

ここが何時なのかはさつき教えてくれた。日付は俺が本来いる時間より、三週間も進んだ夕方の6時半過ぎだという。長門（兄）が日付時刻を秒単位まで教えてくれた。

じゃあ何故ここに飛んだのか、戻る前にやる事があるのか？ひとまず俺は三人にこれまでの出来事をダイジェスト版で教えた。長門（妹）ならこのくらいの説明で殆どを認識してくれる。だったら兄も同じように把握してくれるだろう。突然女になっているなんて、あまりにも恥ずかしいような内容なものには抵抗したが・・・

一通りの説明を終えて、お茶を飲み干し、朝比奈さんからもう一杯お茶を頂く。

お茶が喉を潤すときにふと思った。こうも簡単に体が男から女に、女から男に変わってしまったのは・・・俺の細胞やら骨やらがとんでもない変化を起こしてるんだよな。誰がやったか知らないけど、これで寿命が縮んだらどうしてくれるんだろうね。

あんまりヨボヨボになっても生きるのはゴメンだけど、あっさり死ぬのも嫌だぜ。

話し終えると、長門（兄）が長門（妹）をずっと見ている。一方の

長門（妹）はずつと無言だ。ああ、たぶんあれは兄が妹のデータやプログラムの解析とかを行っているんだろう。じゃあもうちょっと待つか・・・

俺の時代では、まだこの兄はいなかったよな。いつ登場するんだろう？そして何のために？

長門（妹）でも手に負えないことが起きたときのために読んだのか？だったらついでに、俺の代わりにハルヒの面倒も見て欲しいんだけどな。

兄妹の解析が行われている間、仕方が無いので朝比奈さんと談笑・・・といきたかったが、朝比奈さんから話が切り出された。

「キヨン君が向こうの世界へ行くだけなら、まだ良かったんです」朝比奈さんが切り出した。朝比奈さんがこのような件で話すのはちよつと意外だったので戸惑ったが。

「え・・・ええ、あの世界へ飛んだことそれだけで見れば、長門が作ってくれたプログラムで、消去できない部分があったのでしょう。だから納得出来ないってことはないです。まああつちで何をすればいいのかまではわからずじまいでしたけど・・・」

「やつぱりわかっていらしたんですね。何かをすべきだったってことは」

朝比奈さん、俺だって伊達にSOS団の団員をやっているわけじゃありません。ましてや長門（妹）とは、ハルヒの次に付き合い長いですすね。団長を良く知っているはずの副団長の座は古泉ですがね。

「ふふつ・・・古泉君の副団長つて肩書きは表向きで・・・本当の副団長はキヨン君だつてずつと思っていました。だって、いつでもキヨン君がいないと・・・特に私がダメだったわけですし・・・」
そんなことないですよ。あなたの時間遡行はこれからだって、きつと必要になるでしょう。確かに古泉の頭の良さと運動神経には適わないですけどね。

「そうじゃないの・・・古泉君は確かに私より頭も良いし、特に涼宮さんに対しては一番機転の利く行動が取れる人です。私もあのく

らい器用な人になればって思ってたけど……でも古泉君は私と同じように命令があつて、その命令を忠実にこなしているだけ。SOS団の団員として行動しているとはいっても、その根本には上からの命令、それに基づく目的があるから……でもキヨン君の場合はそういうた枷になるようなものがないでしょう？」

「どうでしょう？確かに……長門にしても親玉にハルヒの行動を監視して報告するためにここに来たって言うし……俺にはハルヒに選ばれたなんてことも言われけど、未だにそんな実感はない。むしろたまたま、俺の後ろにハルヒがいただけ。ただのそれだけだし、か正直思えない。だから今の俺のポジションは、ひよつとしたら谷口や国木田辺りが受け持つことになっていても、少しもおかしいとは思わない。でもさ……見た目や程度に問わず、三人の方が貢献度は十分高いと思うぜ。命令の有無とかそういうのじゃなくてさ……

煎餅を一つもらって口に運ぶ。少々じむさいけど、醤油が効いてて旨い。バリバリ音を立てながらかじり、お茶で流し込む。

「キヨン君……これは禁則事項が含まれるから、あまり細かいことは申し上げられませんけど……この時間に飛んだのは、長門さんのプログラムによるものなので、私たちもそれについての理由や原因と言ったものはわかりません。それは長門さんたちの管轄ですし、私たちもそこは大きな問題とは見ていません。元々規定事項でもあるからです。でも……キヨン君の体に変化したという出来事に限っては、私たち未来の人間から言わせて頂くと……完全にイレギュラーです。これはかなりの問題なのです」

「……つまり、あの世界へは男のまま飛ぶのが本来の規定事項だったわけですね？」

「ええ……キヨン君は……あ、その後が何をどうするのかは……ごめんなさい、これは私の判断で禁則事項にします。今はお話できませんけど……でも……今の話だけはあつてはならない現象なんです」

「・・・」

「少なくとも私たちの未来では、男のままあの世界に行つて・・・ある一つのプロセスを実行することで、長門さんが作られたプログラムが起動され、長門さんが改ざんしたといわれる世界はそのまま凍結。その上で完全に消去される・・・そういう歴史でした。そして消去と同時にキヨン君はここにやつてくるのです。ここでも一つだけ・・・これは必ずしなければならぬことではないのですが・・・キヨン君の判断で一つあることをしてもらつて、終わつたらそのまま私が元の時間に戻してあげる・・・そういう歴史のはずでした」
「なるほど・・・じゃあ女になつてしまったことで、俺は自然とやるべき物事を見過ごしてしまつていたかもしれないわけですね」
「おそらく・・・その行動がどれほど重要性の高いものなのかは、私たちにもわかりません。何しろ、私たちでさえも伝聞情報でしかなくて・・・つまり確証がないんです」

「・・・」

まあ長門（妹）自信、成功は保障できないつて言つてたプログラムだから、どこへ飛ばうがそれは問題じゃないんだな。前も、飛ばされた場所は同じ文芸部の部室だったけど、四年前つておまけが付いていたよな。まあそれだつて朝比奈さん（大）からは既定事項つてお墨付きを頂いたわけだけど・・・真夏の中、冬服で汗だくになつて、しかも上履きで外を歩いてたっけなあ・・・

「まあ、二人の意見を待ちましょう。もう起きてしまったことです。慌てても本質を見逃すだけですからありません。解決する方法が全く無くなつてしまつたわけでもありません・・・何よりも原因がわからないなら、それをまず突き止めないと・・・」
尤も、俺が原因を突き止めることは絶対無理だけどね。

「そうですね・・・私たちだけで悩んでも仕方ありませんし、待ちましょう」

朝比奈さんがチラリと兄妹を見る。そういえば長門（妹）の雰囲気
を苦手つて言つてたよな。今日はどうやつて入つたんだ？それなり

に度胸でもつけたのなら、成長したんだなあって・・・年下の俺がそんな感心してどうするんだ・・・

余計なことを考えてしまったが、兄妹が解析たぶんを行っているその間、俺はコレまでの出来事に不審な点がないか思い出す作業に入った。

朝比奈さん（大）は何かお話してくれないかというような顔をしていたがけど朝比奈さん（大）、ごめんなさい。ここが部室ならそっちを考えても良かったけど、ここは長門の家。しかも二人は真剣にデータの解析をやっているのがもう見て分かるんです。話進められるようにしないと・・・

そんなわけで今までのことを思い出す。出来れば思い出したくはないが・・・

（谷口・・・あなたの机の中どうにかしなさいよね！）

（すぐ見つかっただろ？）

（見つかるわけねーって。これかな？って引つ張ったら床に全部ぶちまけちゃったよ）

（マ・・・マジで!?!）

（ひょっとして〜キョン子とは別に彼女がいたりして〜？）

（違う!）

（付き合っていないって!）

そういえば些細なことだけど、谷口はあそこで何を焦ってたんだろ？追求しようかと思っただけで、ハルヒが突っ込んでそのまま流れたんだ。後は待望のパソコン起動でそれどころじゃなかったしな。まあ谷口のことだから、ラブレターをもらったのか・・・もしくは俺を最初から女と思ってた割りに、男のとくと変わらない付き合い合いつて感じだったから、俺の下駄箱にでも入れてイタズラって公算だったのかもな。

まさかアイツの机の中に、今回の件の原因とかが見つかったなんてわけはあるまい・・・

ずっと妹を見て解析していた兄が正面を向き、眼鏡を掛けなおしてこう言った。

「・・・途中で何者かによる・・・外部からの改ざんの可能性が見受けられる」

何者かの改ざんだと？

「・・・と言うことは・・・キョン君が女の子の姿になったのは誰かが歴史を変えようという狙いがあったのことなんですね？」

朝比奈さんが身を乗り出して聞く。

「・・・少なくとも、有希の方でこのようなデータ変更が行われた形跡はない。勿論、有希が自らデータの改変を行ったわけでもない」

「つまり・・・長門（妹）の知らないところで行われたということか」

俺は長門（妹）を見ながら言った。

「そう・・・無意識的に改変を実行させるように仕組んだ可能性もある」

「そんなこと・・・出来る人っているんですか？少なくとも私たちの世界では、あなた方の世界の人たちとはお互いに絶対に干渉しない流れになっています。この時代だって同じなんですし・・・」

朝比奈さんは乗り出した身を戻しながら言う。

「誰がやったかまではわからないか？」

「わからない・・・でも・・・あなたとあの部屋にいたとき・・・私は少しだけこの空間に適さない状況が有ったことだけは記憶している」

長門（妹）が当時の自分の状況を説明してくれた。

「俺が女になったたってのが、未来でも大変なことなんですよね？」

「その通りです。詳しい目的はわかりませんが、長門さんによって改変された世界へ行くのは規定事項です。でも、その世界の内容は・・・以前にキョン君が訪れていたときと全然変わらないうんです。ところが、大きく様々なことが変わっていたでしょう？」

「確かに・・・ハルヒや古泉が違う学校に通っているところまでは同じでしたが・・・出会ったきつかけは全部図書館でしたね・・・」

「・・・有希とあなたの情報を元に解析してみる」

「それはいいけど・・・どのくらいで分析できるんだ？」

「・・・僕だけの分析は不可能。情報統合思念体を通せばそれほど掛からずにはすむけど・・・このデータを直接そのまま回すつもりはない。第三者が取り込み、結合できないようにして、断片的に解析しなければならぬ。だから3時間から4時間は掛かってしまう」

「そうか・・・何週間もって言われたら困ったけど、そのくらいだったら問題ないさ。それまでここにお邪魔するのは悪いけどさ」

「・・・構わない。でも一つだけ」

「完全に分析できるかどうかは保障出来ないんだろ？」

俺は即答した。大体言いたいことが読めるな。兄と妹。宇宙人であっても血は争えないんだな。

「・・・そう。結果は出せてもそれが正解かどうかまでは、この方法ではわからない」

「構わないさ。どっちみち足を運ばなくちゃならないんだ。そのときにまた二人の力を借りなきゃいけないかもしれないし」

「・・・」

長門（兄）は妹よりわかりやすく頷き、そのまま奥にある部屋に入った。分析作業に入るのだろう。まあずっと邪魔しちやいけないって緊張するのはさすがに疲れるから・・・気を使ってくれたのだろう。妹より人間的なのかな？まあそれはいいが・・・それにしてもなあ・・・

「一瞬の隙について状況を更に改変させたわけか・・・あ、長門、一つだけ言っておきたいことがある。兄貴にも後で伝えといてくれ」

「・・・」

「また自分に責任があるようなことは言うな。誰だって隙をつかれて利用されることなんていっぱいあるんだ。ヒューマノイドインタ

「フェースだからそんなことあつちやダメなんて考えは捨てちまえ。完璧なのを求めたくなるのは（俺や谷口以外なら）誰だつてあるだろうけど、求めすぎて逆に自滅することだつてあるんだ」

そういうのを神経質つて言うんだよな。ハルヒだつて、真剣に完璧を求めているようで実際はそうでもないんだ。何だかんだ言つてて楽しむことが出来ればそこで妥協している部分もあるんだしさ。

長門（妹）にはしつかりフォローしなければならぬ。無論、心配は少ししかしていないのだが、やっぱり言うべきことは言つておかないとな。

大体そうでなきゃ、朝比奈さんはとつくの昔に、朝比奈さんの事情を知る前に未来の人間に戻れと連れてかれてるさ。

朝比奈さんを例に出すのはちよつとどうかとは思つたけど、まあ体現者だからな。朝比奈さん（大）もわかつてるから大目に見てくれるだろう。尤も、横目で朝比奈さん（大）を見てみると、そうですよと言わんばかりに笑つている。

表情こそ変えなかつたが、長門も肩の力が抜けたように見えた。

「・・・食事の用意をする。食べて」

「・・・ああ、悪いな。ご馳走させてもらつよ」

今のこの時代では家に帰ることが出来ない。家にはもう一人俺がいて、待っていると言う話があつたとしても、そのまま上がり込んだら親は大混乱するし妹とシャミセンもどんな行動を起こすかなんて予測が全く不可能だ。それに、女でいたときにお菓子を食べた記憶はあるのだが、食べて腹を満たした感覚なんぞもう忘れてる。それどころか、実を言うとお腹で仕方が無かつたのだ。だからご馳走になることにした。静かな部屋だつたから、実を言うとお腹の音を隠すのに必死だつたんだぜ。長門たちは気にもしないだろうけど、朝比奈さん（大）の前でそれはみつともねえよな・・・

長門兄妹が席を外したコタツでは、朝比奈さんからも一つの話聞いた。

さっきもチラツと言ってたけど、ここでも一つ何かをやらなければいけないようだ。ざっと説明するのは禁則事項にもならないだろう。朝比奈さん（大）も会話のネタが尽きるのを恐れてか、ここでのミッションについて説明してくれた。ただ、判断は俺の気分次第でいいという。じゃあそれは現地で決めようと言うことで、その後は長門（妹）の食事の用意が終わるまで、ずっと沈黙してしまった。

- 6 - (後書き)

オリジナルキャラって言うのでしょうか？(笑)

長門(兄)が登場です。

ネットでは性転換キャラとして「長門ゆうき」になっていますが、ひらがなはちよつとなあって個人的な考えから、適当に漢字の名前にしてしまいました。

まあ優しくて貴いってのは、名前負けしてなくていいかもってことで・・・

男性化したキャラでは長門が一番好きです。制服はキヨンくらい着崩しても似合いそうですけどね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5378i/>

涼宮ハルヒの消去

2010年10月10日03時52分発行